居行子

二

1 5
1424
2

門 15
號 1421
卷 2

早稲田大學圖書館
昭27.6.16受
藏書

早稲田大學圖書

㊁麻

居行子巻之二

目録

長生之辨
形勢乃教訓
冥加之辨
まがつの月
頌城乃辨

長生乃辯

夫人世の弱く貴ぶ所のものは福録寿の三つにてぞんして寿を以て第一とす。古人も以ての外に高く下きもかくごとくなれども命うち。懐儀のごとき小事よりてなるまで生とし生るものいづれか命をもとめざるうち。南斗星は人の生ることを司どり北斗星は人の死ることを司どる。誰か南斗星をあがめ北斗星をあがめざるものあらんや。天地の間に生ずる才智の人もまたかくのごとくに男子と一人として出生せざるものなしと仏神よあてどうしよ願うけるあるべきやうに。北斗星をあがめ

たまへども命の行くをいかにしてかとまらんとすれども
行くを命ならばとてども。其性命をあらそはん根元を考へず。上てる
貴人いやしきよりいたく命を大切にせんと願て物を愛をけづる
まのあたりて循環の中をうる人かど。下くにても能角命長
かし。貧をも下賤のものよりあるいは公の食用はたいたる大命
をけづる愛をもざい財宝よりをりれば公のまにうるとて。
是ほどまで身をたてまつれ。指出よりまづ大命をたてまつて。
天地を仰て行ふべよ。下賤貧窮の者は長命多し。されども
貴人は勿論下にいたりても。寒暑燥湿風の外邪
胃見世をとゝのふ清ふる人多くまづ。古人の云のごとく人世

七十古来稀なりとなり。長命はめづらしきものなり。地で命をかく
して。他事を為ざるべし。諸藝伎者多の上をとるとも上より名
人の名誉を取。皆六十五十以下にてのまどろく若び
を初めて愚にて名誉をとるよりつゝむしよりと行事
にても名をもとめきこゆ大人をいたく若よりていとく名高
ときまべ。かうしず過失あるべるものなり。西行法師ゞ命ながらと
願ぐらまてぐく。命ながきまにもあらんとも大切
とゝげ。稀なるも絶よい名誉をとれ。まゝまべきをとる大切にして長生
を祈ふべ。命をまもり。抑長寿ずんとを願べ。凡人へ小天地に
て陰陽の間より生れ。行事をも天地とゝ仰よわるべきをとる

かゞとなれるを知るべし。上古のいにしへより春夏秋冬の序。生長
収蔵の功。日月の運行。寒来暑往。ひろく一日をもやまんと
いとまもなく。万物を生育して陽は昇り陰は沈む。自然の
まゝにとゞまり止時なし。如此の気をうけて生ずるものゝ
死期一生の息のたゆるまで。休もせずして安楽するものなし。
ことわりなるべし。駱駝がいとけなくして木の毒なるべし。
旦暮かゝるにわかに木の実を喰ふとも其性を損ずることなし。
うゝとして人もまたかくのごとく。此方より命ずるがゝを欲して。補茅を
のゝ。安逸を求め勝腎を業とする物といへども。美肉野菜いろ〳〵
ふかくのゝ欲をくひて美色を慕ひ。房室過度なして

性命の根元を耗散し。ことごとくふかく身乃辛労と
いとなむ。命のながくんまを欲して。初て命を縮ることを他ひ。人の
天より授りし其性を順ふ。ことごとく物を極て。ひろく
日陰の陰湿の地をとんで。青〻と潤へいあれども枝葉よ
繁ることなし。潤へる処の地をとんで枝葉こゝ枯燥して
みなげることなし。日もて潤へるあれども風乃ところ
うるはし。虫ありて枝葉もなくして繁茂せず。日もあらと雨を
かゝるを嘉もうるひ。風もとゝまるを悪て。おのゝをそれやすく拾
をとんで天の自然を得て。かゞやかしく生長し枝葉繁く茂る。
人もまたかくのごとく。気苦労も身のとゝまるもずんし。

あるいは風にもあたり暑さにもあひてかくさ
食をえんがためにかくのごとく身を苦しめ
ぜめ天地をたのもうぶ世の事は多欲にして
をやうやうに天地の自然よりする道理学問の礼無くして
い風寒暑湿温疫気の外邪も皮膚より間隙うちれば
ずうく命をかくんまをぬぜんとも自然より長生
うり花とびめまをかくる若年より素駝を傳へうとて身をたもち
事五十餘年六十より向うてはまど年期いつうるとてもあらじ
今日よりあらんや古稀よりいつくんやうべかるべき雖もけだし
をかくて天命をたもちぬべし抵長生をうる所をあらうとなる。

ちうまでも愚にしてくに按ずるに世の長生をうる人其身は堪能を人い
七十をうるとも八十より成るとも人よりあるべき事もうすく等うてはかりこと
ゆくいつまでも長命をすんとを人く祈りて世界の穀潰にもうう
さまたげいつもさこそはかりこと此ならびに其の者いつて百歳のうちにて
長生すまたいやしき山がつとても無をいてくのこのをうをあや
がりのと長生のかしあり人絶ることのも無よりたづねて死ぬを
人くもはまたまかりあるがくまをまうう五十絶えてうかすぐしまでの
あるべやうとうよ老耄よりやく人ようとまれ女色極酸の味も
うくはりたもうげいかりまとどもいかつくめをのうまでいまの者の
はりまを義絶よい老ひぬくの公でき若き者をいきいうくの

元ひとしてもあさらんをくよりとれば。其あさらちよりて
人に千人は三人大かたい世よりつ生れ出ぬ。さる人の親
力年賀よ杖をまいらせるとて。ぢく杖の竹のかよみぞくく出
るあるさる老の物おとよりたる。其老かたちる。聞い
声に耳に悔るれ歯に落て。雪と載くすでとうりて。初年
耳順と歴て年とうへよい。世乃さまうつりぬ。移るたる
世のすくへるまぶ。自分の若らく時のまに一りるあらす
いしへ出をまに古ちんしとうまつまぶ。今の流行とい去るぶらにく。
人くもかくしるれぶ。ちつかりてひきうきめてたれをまぶとと
くくしく。なくなくて死朝のらくく

まとれをくが行るあくく。五行を天地よりかくすくくこの
かるよぶ。人くの生せぶ。乳ほるくく行をれるし
るるまるるれども。仏法よたるり出家のすをたるよ。
朝夕やまく木魚よ。たるき鉦よ小磬よたるれるく。来
世のことを祈ひさいぐも。ちつるるる。是非うるるのるうう。
八十よりか老翁にくもるるき花の風雅の場にぼよりかくしく
くまるさくれてもらくし。むくくよりかるにてんぐにてもいしく
居りがくれをくるさ。信ぜるれ和尚の印法紙よ買るかぶの世信くて
わるがとりくるし。ちよとて名まん。仏名かりぶことくるる是非
るれぬくのまるれぶそのやくよくくまれ長生せんくるるも

うたまうう。兼好法師もさうすれば人うゝ四十だうゝぐく
死んどがようゝけまぐよりてのいたゝまれて死めるがようゝや
いてくるゝんぞものゝ大病して死のぞんだる命うりとも一日
うりやこゝ。どう少めたくさるどゝくもれゝむ。左衛の人うれば忠臣蔵乃
浄瑠璃ぞよ。おるどてこゝ面いをとゝのこゝとつゝやゝたゝもにしゝも
いろゝゝ接待いゝ。公のうらをとゝわれむゝもわるぎとぴよ
あすよりやかゝづきをまゝこれ。二百七日と延うして人くゝよたいうん
せゝうもたくゝきまうゝずやゝかやうのゝをたゝとんゝそゝ。迷ても百年命を
公とたゝうゝ。七十八十の長生もものどまゝかゝきゝびゝ。二十にもうゝくゝど
浮世のひまをとゝゝ。たゝとどんの花ろへゝうんぐうゝ。ろゝて花

君行録二

ゝよ公をとうゝ。枯木のゝぐゝけるやゝゝも枯て生涯と行ゝ
ん。滴ゝの示よ天命を待ゝて去ゝゝゝゝ人よりゝまゝゝあゝぐの
ゝ。二十ゝぐゝ誰をゝゝひ人も力ゝゝゝゝ。酒ゝの楽が毒ゝ
かゝくゝく命期きゝゝぐ幸ゝたゝ命。寿長ゝれば辱ゝゝ
康頼も薩摩如と両人趙國を守護ゝ。康将軍ゝいゝゝゝ
時分よ死ゝ生ゝ後よ小便ゝなゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝ。大食大酒をのゝ食ゝて使者ゝゝゝゝゝゝゝゝ。左
後の和いわゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ長命にゝ大功ゝゝゝゝ人。程
ゝれかゝぐ。ゝゝの有功の人い良ゝるゝの境所にあゝゝ。ゝ法
小器のゝゝのゝゝ。生の力ゝゝゝ天花への孝ゝよ仏ゝゝ

ゆくもすぐき事なり。神数質砂る好い宮殿大夢より帰して
長経をいつよりいつ。なぜ行るみぐるさも命かるらのことを。
そもそも人五十人身を一生とそこ此ほい宮殿一生のかとこへ
五十身を情こ事りしに思へ中。たもまた酒をよ枕つこく
と思くど。老人よいたもちろ個よよめてくれる人もうく。身の
の陽も仏よまを在ぞ。青樓妓館いわこそんたも力たもいが
ぬ今銀よこたくいこそこまでいこそ見ぐ深草の陽士
にるこふこそでも。たく持わる長者でも星の張こんほるもふ
ひとつてこれどの事へ。けんひ沢もまうるめ。ぞ行のこ行つぐ
ぬ事人生とはどりで。弓張りかこまりてつこそ

ふこそもたたこしやここもるるこ。かいもこ男のあでるこそもたたこる
銀がりひみとうんぐくこつくここそもがくやこ水線の欲
てくまこそもあろふくまこど二階ここ百両こくこくこと舞
てこそれる人ぐまこぐ訪しこの撫ぐどうぐんよこる百こ
ま水浄もたこまこぞ。ぜこまるこたぐのたやこの湯こくこるこく
年期よいこんこれ口たここくこたこここるあこん
人いこくこたまこくこ

形勢乃教訓

長月七日の頃宮もこる曇り。伏もこる濃く成ぬ貴賓高人
も聲さひく。実福九大こらもこ。風も身よしこん初こぐ

しるを彭澤の會よりづゝ如あてもるゝ花びらをまてしとゝ
ゝの家の小女さつゝよ居侍らく
花園の卅蜂をとくやといとゝまりしかいゝ娘ゝらもさそへん
うりと考とゝ好るものとしてつまろくげよや海ゞまとすく
もとゝかるゝるゝ花の隱逸するものといとたる菊をゝ
富貴のゝ象のとてあるべとうる君子るものといつて花も
學ゝ文潛上の高くうると蓮をすけど雅人乃やよきこゝ
也人濂溪化やゝと問やゝの顏してとてゝ貴のよれわゝとゝやら
知人も好牡丹かゝるゝ自分の拵ゝ人ゝとゝよ富
貴うるものゝく考とゝ化牡丹を愛するゝ是菊せるゝ

いやゝ流行擬俳諧の流をまゝ皆れはゝ戲場
の主人のれゝるゝまゝ公ざまゝ
ゝり好ゝ芝居の泡ゝ深ゝもゝんのゝゝんゝ
いやゝゝゝ髻も和ゝく流り姫奥ゝのゝれやゝよゝゝる
ゝゝとやゝゝゝて身ゝゝうゝくゝゝゝゝゝとゝゝれ
ゝ化粧せゝゝゝゝゝゝゝゝ後妃入間のゝ移よゝ
ゝゝゝゝやゝの說法冥加錢乃出ゝくゝもゝゝゝゝゝゝ
かゝゝりよゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝるのゝしるし。此事唐土にいでゝ眞名と連續しゝる
文字もゝあゝぼゝこゝと和邦よりこゝにきたりて日本記
神武乃巻に眞盧しゝてゝ出ちつゞけて和邦のことゞに神明乃
眞四詩とゝあるゝゝ眞ゝ暗也とゝくゝ仏ゝゝゝ加ゝゝゝ
るゝゝ。仏ゝゝゝ去ゝゝゝゝゝゝゝ。家身ゝゝゝゝゝゝゝ。
眞加ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。抑ゝゝ世ゝゝ人身にすゝゝる者
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。人ゝゝ無ゝ血の費ゝゝゝて。地入乃ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うく其身よりはじめ奢りをはぶき費素にして經濟
をよくするをもつて倍よりも身上持のよしなるを倹約をよくする
とつて脩身齊家治國平天下の本とす。晏子春秋に晏子
景公の問によりて或い諫をのべる治国の言葉倹と奉と也
ざるべし。吝嗇とは二字なるべし。けちんぼうとも
いふべきなり。晏子曰嗇者君子之道吝愛者小
人之行也爾財多寡而節用之富無金藏貧不假貸
謂之嗇積多不能分人而厚自養謂之吝不能分人
又不能自養謂之愛こゝを以て嗇ハ人を治むるなり
がりもせず又人よかりもせず。身上のはめの善惡をこゝろ

そなへたるとばかりにてよくもつぶさるゝ者なり。その行ひとうり
多く積蓄しても財寶をたくさん世の義理のみちをもかは
らずして非道の沐寶をもとめ身をたくさんとよ情を
かけてもせず貪欲にして己が榮耀或ハ飲食嗜欲のたぐひ
このこゝろを出し人を恤ひ勤のまゝに一向せざるこゝろ。愛とハ
天下のためにするなり。死のるとなり冥途にゆくとなり
たとへん。佛經よりこゝろ。妻子珍寶及王位臨命終時不隨
者のこゝろ人もたもつべし。財宝を結搆するものなり。生涯
をたもち身をたさんと人を恤まずして大切にすべきなり。たとへよ黄金を
堆くして北斗をさして生前すれのふるもあるべきなり

ゝ。ゝ。ゝ財寶をかりゝ惡をすゝめゝ人間の糟也。
此類の人世をよゝ亡ぶゝ。夏加ゝ前よりゝ亡。たゞゝ去
きあかゝゝ。ゝんゝゝを為ゝゝゝたゝゝ仕宮人
ゝゝ。自身のゝゝゝゝゝ功もゝゝ孝ゝゝゝゝゝ
たゝゝゝゝゝゝ作廣ゝゝ加增ゝゝ夏義ゝゝゝ
和領ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
燈ゝゝゝ。油ゝゝゝゝゝゝゝゝ。音身上のゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

油を一ゝにしても費さゞゝゝ夏加ゝゝゝゝゝ外ゝゝ。
家内の下人自分のたゝゝ燈ゝゝを揚て油を費ゝゝゝ夏加
よいからゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
夏加ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

入来り物ゝの用をなすまで幾何の人力を費しく
出来るや。一滴の油のごとくもその人力の功ことゝなる。まゝふ
を行の妙なり。無用の費ものゝ天地の費。その人力の功と
なりぬといふものゝごとし。これ翼加ゝ人ごとゝ。木綿紡績
糸穀器財等如何ぞ。此意絲へ倣ゝ。ものゝ人
ゝ多。吾身上の如入り多寡いこれ倣紡ふ倣紡也。
翼加ゝ人の紡績ごとゝ。村ゝ費ゝ費ゝ
ぬのゝごとゝ。世間の人人力吾財寡力ゝ
乃ゝ。下人ゝ
すゝ。臺世のみゝ書ゝ

窓乃月

世の中ゝ山乃ゝ
さゝ秋のゝ。家身ゝ
ゝゝ。秋の青ゝ身ゝ
すゝ移ゝ世のゝ。ゝ身ゝ
ゝ卿大夫の家ゝ
藩屏の家ゝ孫等の書ゝ
英才博識の器ゝ諸子百家の書ゝ解
わゝ。沽ゝ氏ゝ入ゝ。出ゝ
神職ゝ一の秘ゝ。方織の家ゝ

ざるべし。鄭會儀式の故なるべし。樂工のかぶりもわるきなり。
南風の詩をもちゐるべし。申樂の部もわるけれども。然るべし。
孝子疎く。医家よわくべし。青囊乃術をもまなびべし。
巫家も生きざれど。卦象の占もちゐるべし。農家わ
らざるべし。耕耨く豊年の祝をもわるし。西家に生れ
さんば公輸子がごとし。高家よわくべし。貨殖ようく。陶朱が富
もす。宋朝が美にもわるべし。身に妾妓女乃ありもすく
う。士農工商をとづまるべし。一匹夫にくぶるを
知り得ずもるべし。暑往寒来く白頭乃悔ひ
忽よいちめ。嗚呼悲しく哉。武松をでも熟世のわりきまと極るよ。

天子の帝身にも患るをとわさらば逆後乃為よろしめられ
給ひし。代々の帝乗輦載らまくべく。其にもすべし。
逆一よりの屋んもかしこいいんや公卿以下をも。菅丞相に
しよ左遷せられ。堂遠流乃罪をえ。行平須磨よさ
すく。業平乃東下り。業房の遁世。楊雄閣より投じく
死し。楊修漢中より殺され。孔明功を半よりて五丈原に死し。
范増諫をもちゐざるを空行路より没し。項羽股肱の臣より烏江よ
さまを。呂布曹操がにもよ害せられ。張飛閬中にかれ。関羽臨沮よ
斬せらる。屈和漢学くいかるべよ。聖賢のうくいもと
患難をのがるべし。西伯羑里より困まる。孔子陳より困る。倘牛

瀬風と病子路傍よりなく。釋門より入事小頓阿西行等のごとく
いづくにてもさすらう世をよすがとなく姿かたちのうつくしき
いとけなきの迷いの俗よりかつがれ鶴乃美似をすかしまとや
いうん。移るまゝの水よりてもとせん。生命の戒行若く
すくるゝ。人を救ふの医術の法ぐ。麝香でも。扁鵲素
に殺さまを。華佗曹操がなやよ害をとれ。倉公竹女提禁ゲ孝をス稍
刑を免る。農家の井を掘く飲耕て食くらんがゝ。朝
夕務を育ゝ。ゆべよい早をいてゞ。旱魃をすゝげさ。株毋をう
らゝ。耕ゝ振ゝく草莚よ飲食。よわゝと流よりまれ
て稲田姉を育。稅務ゝたらゝ事なとん

幾何ぞや。立高力器財をたくるも。なくとんとたくるで
ゞ人こまを愛ゞ。寒夜よりを揚て。風流
ゝ。昔日よ汗を流ゝ。氏曽よ乃ぶ。機乃たくすす陰
をなゝ。月の夜雪のあゝ。この手もまれゝ。高家乃
人を貧苦とゝ。貧苦の貴賤よりをくゝ。人くの
虫ゝ。あよなゝ。散財をゝ。蓄積の功と折。苦歳何
ようあゝん。神職有職楽立。多の人くも。各ゝ乃苦ゝ。
美子。假も。龍なゝ。刑せん。揚貴妃馬嵬乃土とる。
かくゝ。ゞゝ。ゞゝ。ゞ

陰陽うつりかはりて伸よりて陽うつり春夏乃生長とる
冬。苦くいこと屈しまりて陰うつり秋冬の収蔵する冬。
陽の伸びくるの好ところ。陰の屈して人の悪所。天地の用よ
せとうぶんで苦のたりてなるなとあるんやまとなのこと
りくく苦くうきまやわんく苦あるを必ふくわる。車の両輪のごし。
陰陽かくくうきまるる。家を公卿大夫の家ようまれるば。
其苦くを勤くく其楽くをふまん　家を一高の家ようせとう
けるば其苦くをうんでまとをたのまん苦くとをとりて力
を作り織をとりく絹よりの金をんや黄金乃たから
たるも鈔を得ざるの不徳あり。名鈔の徳をうり乃黄金も

錆を得るの不肖あり。天下の人くるるを求まるとる。
求るれるまうる。ちうよ世人くこがくるくとを知くたれるんを
ちくぶ他乃人くるとを祭ぜずくぶたのくとをやむ愚がごと
れ人くるれるとんくまでぶ。やむとをもうるかわるむまもうる。
君子を入くくくく自得せばとりてまうるとうやきくを。家
居くと富くく建たくく徐よりくのおよきよくとをくく山海
乃珍味を集てを。膳を客ようを過てよすぐぞ。仏の貴さ
人を恃の願あるとまく。高王をと罪と改るの侵あり。
螻蟻も己がおくあくどくくくてけとをふまざるんや。古人いつ
くあり。分を安くとをく福をとくくく胃を賞くくとをくて礼を

費と者くとつく財とまとふ者と何年を
をもかるに屋くもおくめ身のよとしもとやかくぬと
ゆまび行とのぐん。俗とうるげん天地の始終一身の生死
有無の由てまるめうん。庸人のかるぐくきつけん紹る
屋とまよあくぐ俗わとしとうてくあ一ちびよ
ちとしん定くすぐしかくんを拾ぐつけ。西行法師も
讃岐院の御墓くまんりくよりや君。むくの玉は屋
かくてもかくらんのうの俗ようせんとよくめ年ぐ墓ゆ
をせばる墳墓も俗よいすうもを用とうる。わく死とうれし
まび生とたけくたんぐぐんれ蕎麦好い死ぬよ百味のをと

俗くくも生前一器の蕎麦といくぐもくくを
山路の花を拾ん。着くく日数とくくもくくた。五月雨
乃こ俗の。余行くすぐ郭公の行とづきをきまら。
橘の花の香ようふくくくとまびん。秋をようすぐく虫の
聲よちくをすまく。浮まくる月よちくくとくとくん軒の
くぐれよ義を催く。雲のくろよ物めをび堤火のとく
よくり。茅蔀の美くよ夜寒くとくくすまく。二の方よ教と
聽。くく世のくくくをたくるのいくぬくん。人已がんりかくよ
のたけくくあのくくうくよ行くとくしかくくるくくくのくべく
にもわくぬくくくかぐぐかくつづくも愚がたけくの一ゆよ俗る。

世乃中いかなるなれかもとさ陸奥もなる

傾城乃辯

世人傾城とゝで遊女のまうちゝくあり。大なる誤なり。今戯場の雜劇より於女のことをけいせいといし。狂言乃外題より。けいせい佛の原げんせい三神山などゝ文字をとらくて書けいせい近世自笑うんどが数作とゝ文字をとらくて書けいせいとゝまた世上傾城を於女のことゝなすようなり。傾城とゝい美人の通稱を於女よりあるなり。其始漢乃世より起れり。前漢書より武帝の時李延年といふ者。音律を好てよく絃歌を作して君恩を求る。或時帝の前にて起て舞ふ。

こゝに曰北方有佳人絶世而獨立一顧傾人城再顧傾人國と武帝歎して今美世より豈かゝるものあらんと平陽公主の言。李延年が妹うゝと武帝即召て寵愛す實よりたぐひなき美人なり。去もよく舞曲をうたひ。よく恩義を得て李夫人と称せり。これ其始なり。是美人の通稱とゝ遊女のことゝ浮女とも云又戯女とも云いとくゝを傀儡とゝ云。於女傀儡ニ成るゝ古く和哥の題にも出たり。白川殿七百首の内前大僧正の哥に船中遊女といふことゝ詠ずるなり。毋よりゝ同じてるそのうち為氏の哥に岸頭傀儡とゝ題ゝく。

河谷の波のよるく笠とぬぎてぬぎまきらるる笠をとれ文順和名抄に漢語抄を引て曰畫挺行謂之遊女待上伎而發淫奔者謂之夜發又曰傀儡子唐韻云傀儡和名久々豆樂人之所弄也顔氏家訓云俗名傀儡子為郭秃女のすがたを木偶にしてくるくるとまはせるものを傀儡師といふ

うり玄恵ノ庭訓にも出たり今世上にいふでこのぼりまはる。

こもと人形戯場のそばまはるみすぼらしきの女をいふ或説に平家ノ島にほろびてのち宮女たちくせ〳〵なくの官女たち身乃置所なきまゝに長門の赤間播磨の室の津などにくらし遊人に身をまかせ恋をうるぬてぬ津の国神崎江口

之島などすべて津々浦〳〵小舟に乗て漕とる者流きの女をなどなりとなり流といひより川と縁とかけり。

うるとをいうんそ川行とぬぎて。遊女のまよひしるるらとをるるる又今紙園町の白くらとのいに遊女なるべし白徒といひて名ばかりにより名目とるるる世俗云町出名のなりくそのうぬ遊女の諸説にくに白徒とぬる

ぬ。白徒白人相通ずきぬるる管子の注に白徒ハ不練の字。

武蔵なるにうとかおあるるるる今云奚娼しくるる男娼の遊女乃通称なり。辻君をなる文字の色町小路の辻にて淫を賣る人よりソウカといひ書ハ恩いまどきしるべ。あれ沒くう

想嫁と書とつゝ芝姫と云ずと云。島原の太夫とつゝ
むし京の六條三筋所より第一の女郎と五指之内より定。五三
の君といふ。其頃女郎より紙を色々より太夫の位は第一の
五三の君の位なるゆへ。くゝ太夫くゝとつゝしなるゝ所をそ
なりて称号とうきとて松の位とつゝ。そなるゝ秦乃
始皇帝。秦山よりのぐりて下りて暴風雨あり。始皇松樹の
下より雨をのがれて其樹を五大夫と封ぜしと史記より出る故より太夫
とつゝたよりて。松の位とつゝ。天神と梅乃位とつゝ。松より次て梅
の位とつゝ。梅は菅家の紋なれば天神と名付たる
なり。扨亦々の舞子より白拍子のことゝ

たもつる。平家物語より白拍子の始りなり。昔
鳥羽院の御宇より島の千歳和尚の前。彼等二人舞出なり
なり。始は水干より立烏帽子。白鞘巻をさして舞けるとは。
男舞とぞやなる。去るを中ごろ。烏帽子刀をのけらるゝ。水
干ばかり用ひる。さて白拍子と名付たるとあるゝ。まこと
後然草より儀乃御師。又其妻の静より始とつゝ。清盛乃
妾。妓王妓女も白拍子なり。加賀の國より佛御前と
つゝる白拍子のなり。相國の御前て今ゝ舞ゝたるの
ことに。君と始くゝ付い千代も屋ゝ姫小松おのいとる
尼が聞よ。去ることもなきかくあそばれと指やりゝ三遍

うたひすまし、たり。えびとえいこの味線なるのまへにたち給へ。之味線の義は信長の時なるべし。之味線とそんうしゃ。そくはかりまでも堂上堂下ぞくにたちくはりとあまた。世の風のうつり、かるまへまうさうち。今の世よさやこゝたちまうたるまもうしゃ。古風なるべき。なるたちろうぞくなるべし。妓女と書てこれらの女ともよろこ。妓婦とも書それ女へ抱あを妓籍ともゝ。又青樓ともいへり。抱あの客を漢名よ。標客といへり。勾欄の侵者野良を。戯子とも男娼ともいへり。野良を冶郎とも。李白が採蓮曲よ岸上誰家遊冶郎と作れり。

女の形ちなどく作りたるうつよりに男と冶郎とつゝけ今のやいうつり故よ今をどる男子を遊冶郎といへり。このやうなを抱あをもて初まりなく功者なるを粋と勝れたるべし。悪ずいなどいへれ。推の字なるべし。推量するといふなり。又島原新町葭原なるの抱女郎をなどいへり。類書纂要曰花柳苑遊女郎の事也。行人忘孝弟忠信禮義廉恥八者一名ゆくよ忘八とも。こゝもまこと邪なり。五雑組なる女を忘八といふなり。和邦抱女郎をなどいふ。密夫なる女を忘八といふ。いとこなどいふ。傳の字也。伝見の抱女郎なり。伝見の抱女郎なるべし。伝見の圓形のかたちなるを郭中

に十文字のごとくありて書の形のごとく故よくつもりたり故よ
十文字のごとくつくりて其形十の如しよりて撞木町と名付
うりえん寺雪と郭の名也又拓不審金の事を花車とのたまふ也
うるこ〻ろ清ふうんどにて古文字に附てかるやうにてのまるるそと
こゝとを岡兩といふ也そのうへ抓こゞるといふ也本艸時珍曰一
作魍魎好食亡者肝唐書に蕣と名よ方相ゆくく鬼
の面をかぶり岡兩をとりぐまるる周礼にくるをを今茅
やうく花車の字よりあ花車さんく〻よび客金の嚷乃
ことよりあ来るるる

居行子巻之二終